

戦争法案を参院で廃案に

衆議院で強行採決された戦争法案（安保法制）は、参議院での審議のなかでその憲法違反の本質がますます明らかになってきています。

国会周辺での法案反対の運動は日に日に参加者が広がり、各地方でも大きなデモ、若者の大規模な集会などが取り組まれ、これまでにない大闘争になってきています。

鈴鹿市でも、7月18日には「アベ政治を許さない」全国いっせい行動に約90人が参加、ベルシティ前交差点でステッカーをかがけて市民に訴えました。

6月市議会で「安全保障法制の慎重な審議を求める意見書」を可決（賛成21、反対10）したことも、画期的なことでした。8月から9月は、国会の動きに注目しながら、地域での戦争法案反対・憲法9条をまもれの声をさらに高めましょう。



党市議団で街頭宣伝

国会で安倍暴走政治に正面对決・日本共産党

国会中継で志位委員長を先頭にした党国会議員団の活躍を見るにつけ、昨年の衆院選、一昨年の参院選で大躍進した力が、国民の運動をはげまし、野党の共同をすすめ、安倍暴走政治とガップリ対決しているのだということを実感します。さらに日本共産党の力を大きくし、国民・市民の期待にこたえなければと、決意を新たにしています。



猛暑が続きます。お体を大事にお過ごしください。

← わが家の田のイネが実りだしました。

消防北分署、建て替えか移転か？

「鈴鹿市消防力適正配置調査報告書」を読む

昨年度の消防本部の調査事業として行なわれた、「消防力適正配置調査」の報告書が、公表されました。この調査の目的は、いまの鈴鹿市の消防の体制が十分か、今後の整備方策をどうするか、の方向を示すことにあります。議員に配布されたのは13ページほどの概要版ですが、全文は150ページに及ぶもので、現状の消防署所配置と車両配置の科学的な分析を行ない、これからの整備計画を立てるための土台になるものです。

現在の6署体制を7署にするか、8署にするか

細かい数字データがたくさん並んでいて読むのも大変ですが、全体を要約すると、主なポイントは以下の点です。

現在の消防署は、中央署（飯野）・南署（白子）・西分署（国府）・東分署（箕田）・北分署（加佐登）・鈴峰分署（鈴峰）の6署体制である。

現状の消防力では、災害現場への到着率が低い地区は、北部の椿・庄内・久間田・石薬師、中部の牧田、南部の合川・天名・栄である。

昭和50年代に建てられた南署と北分署は、近い将来に建て替えが必要である。また南署は低地にあり、津波による浸水が予想される。

南署の現状配置はいい場所で、現在地での建て替えが望ましいが、津波浸水を考慮すると、上流の御園町に署所を新設するとともに、南署のバックアップ機能を持たせることが必要である。

北分署は、現在地で建て替えるか、石薬師町に移転するか、あるいは石薬師を新設とすることも考えられる。

北部と南部の優先度については、南署のバックアップ機能ということから、南部の新設を優先する。

消防署北分署（高塚町）

調査ですから結論は出ていませんが、報告書から見える方向性は、2老朽署の建て替えと、2分署の新設を、どのよう



に進めていくか、という道筋です。議論はこれから始まるのですが、裏づけとなる予算的な面からも検討されるでしょう。これから消防体制の充実に、どれほど重点を置くのか、どれほど予算を投入するのかという政策判断が求められます。

この報告を素直に読めば、南部の新設分署の建設→南署の建て替え→北部の新設分署の建設→北分署の建て替え、で8署所体制になります。しかし読み方によっては、は無し、が北分署の石薬師への移設になり、7署所体制で終了というケースもあります。それでは、加佐登・深伊沢・鈴峰など、今より不便になる地域ができることになります。

また、今回の調査では、マンパワー＝職員数は検討の対象外となっていて、消防署を増やしても職員をきちんと配置できるかという大問題には、まったく触れていません。いまでも基準より100人も少ない、200人体制で仕事を回している現状をどうするのか、施設と人員セットの議論が求められます。

「サミット」開催で、三重県の何が変わるのか？

2016年主要国首脳会議「伊勢志摩サミット」開催が6月に決まって以来、毎日のようにサミット歓迎ムードを盛り上げる報道が続いています。鈴木知事はサミット準備に人も予算も集め、「推進本部」、「三重県民会議」、県職員28人を含む43人の事務局を立ち上げ、「千載一遇のチャンス」だと位置づけて舞い上がっています。

来るのは観光客でなく、忙しい少数の政治家と大量の警備要員

過熱気味の報道を毎日見るにつけ、多くの疑問が湧いてきます。

「サミット」は世界でいちばん忙しい政治家の会議です。セントレアから慌しくヘリで来てすぐ帰る客に「おもてなし」に努めても、ゆっくり景色を眺めたりおいしい魚を味わったりするヒマがあるのでしょうか？

わずか2日の会議ですが、その何カ月も前から警備やテロ対策などで、一般観光客や地元住民も落ち着かないのでは？それどころか、厳重な規制で志摩に近づけなくなるのでは？

鈴木知事は「一過性にしない」と言いますが、どう見ても一過性のイベントです。94年の「まつり博三重」を思い出します。当時「あとの祭」と書きました。ムリヤリ動員の押し付けも大変なものでした。

今でも遅れている県民の福祉や暮らしの施策が、後回しにされませんか？

ずいそう



安倍政権を笑い倒す

安倍政権の「戦争法案」暴走ぶりに、全国各地で若者も女性も立ち上がり、「ストップ！アベ」の声は日に日に広がっている。国会で共産党をはじめ野党がしっかり追及して頼もしい限りだが、いま書店では「安倍政権を笑い倒す」という本が売れている。辛口評論家の佐高信と、お笑い芸人の松元ヒロが、安倍晋三を「笑い飛ばして闘おう」と宣言した書で、毎日のニュースや新聞を見てカッカとなった頭を冷やすのに役立つ本である。

「またつまらぬものを斬ってしまった」

松元は、安倍が国会見学の小学生に「どうして国会議員になったか」と聞かれて、「父もおじいさんもこの仕事をしていたから」と答えた場面に遭遇、「これは正真正銘のバカだ」と呆れたと笑い、佐高は「バカな大将、敵より怖い」との先人の名言を話すと、言ってないのにみんな「アベ」のことだと連想すると笑う。そして二人は、人気アニメの決めセリフ「またつまらぬものを斬ってしまった」と大笑いする。

松元ヒロのライブ公演は鈴鹿や四日市で見たが、いつも政治家や権力者をネタにその愚かさを笑い飛ばす熱演が大好評である。しかし、ライブを見たテレビ関係者は「いやあヒロさん、面白かった。しかし、絶対テレビには出せない」と異口同音に言うとか。佐高は「権力を笑わない笑いなど、笑いではない」「この国を戦争のできる国にしたい安倍によって、笑いが殺される日が来る。いや、すでに来ている。」と語る。

先日のNHKで、安倍が出演して安保法案について「となりの家が火事になった」などとトンチンカンな説明をしていた番組があったが、漫画家のやくみつる氏だけがズバリ、面と向かって「あなたは裸の王様だ！」とマンガで批判した。見ていてスカッとしたが、しかしこんな反対意見が出る場面は、テレビではほとんど無い。やく氏も今後、佐高や松元のようにテレビに出る機会がなくならないかと、心配である。

でもテレビだけがメディアではないし、世論と運動の盛り上がりとともに、マスコミの論調も大きく変わってきた。文字どおり「安倍政権を笑い倒す」日が、近づいていることを実感する。